

ねん がつ にち
2022年3月27日

し じゅんせつだい し じゅつ
四旬節第4主日

きくち いさおだい しきょう
菊地 功大司教 メッセージ

ルカ福音は、よく知られている「放蕩息子」のたとえ話を記しています。この物語には、兄弟とその父親という三名が、主な登場人物として描かれています。

2016年の「いつくしみの特別聖年」のあいだ、教皇フランシスコはしばしば父である神のあわれみ深さを語り、そのいつくしみの姿勢に倣うようにと勧められました。その年の5月11日の一般謁見で、この物語に触れこう語っています。

「父親のいつくしみは満ちあふれるほど豊かで無条件です。その優しさは、息子が話す前に示されています。・・・(弟が自らの過ちを認める)ことばは、父親のゆるしの前に崩れ去ります。父親の抱擁と接吻により、彼は何かあってもつねに自分は息子だと思われていたと悟ります」

その上で教皇は、「父親の論理はいつくしみの論理です。弟は自分の罪のために罰を受けて当然だと思っていました。兄は、自分の奉仕の報いを期待していました。二人は互いに話し合うこともなく、異なる生き方をしていましたが、両者ともイエスとは違う論理のもとに考えています」

「傷をいやし、和解とゆるしの道をつねに差し出す準備のある、野戦病院となること(東京ドームミサ説教)」を教会共同体に求める教皇フランシスコは、しばしば神のいつくしみの深さとそれに倣うことをわたしたちに説いておられます。

同時に教皇フランシスコは、特に現在の感染症の状況になってからそれが顕著ですが、わたしたちが世界的規模で「連帯」することの必要性を強調されます。「放蕩息子」のたとえ話も、単に父親の限らない優しさを記しているだけではなく、その優しさが、実のところ「連帯」に基づいていることを明示しています。

おとうと むか い ちちおや ちちおや み ことば まえ
弟 を迎え入れた父親は、「いなくなっていたのに見つかったからだ」という言葉の前に、
「死んでいたのに生き返り」と付け加えています。 弟 は何に死んでいたのでしょうか。

おとうと むか い ちちおや たい ふへい い あに ちち まえ わたし いっしょ わたし
弟 を迎え入れた父親に対して不平を言う兄に、父は「お前はいつも 私 と一緒にいる。私
のものは全部お前のものだ」と付けています。

すなわち、ここで家族として描かれている「共同体」の絆から離れていることは、い
のちを生きていたとしても「死んでいる」ことであって、その絆に立ち返ったからこそ
おとうと し ちちおや かた きょうどうたい きずな
弟 は「死んでいたのに生き返り」と父親が語っているのです。 共同体の絆、すなわ
ち連帯の絆に結ばれて、人はいのちを十全に生きることができるのです。父親の優し
さは、共同体の連帯の絆に立ち返らせようとする愛の心に基づいています。

れんたい い み かつ きょうこう にせい かいちよく しん かいはつ
「連帯」の意味についてしばしば語られた 教皇ヨハネ・パウロ二世は、回勅「真の開発
とは」にこう記しています。

れんたい いた そんざい むすう ひとびと ふ こう わざわ たい どうじょう
「(連帯とは)、至るところに存在する無数の人々の不幸、災いに対するあいまいな同情
の念でもなければ、浅薄な形ばかりの悲痛の思いでもありません。むしろそれは、確固
とした決意であり、・・・共通善のために働くべきであるとする堅固な決断なのです
（「真の開発とは」38）」

しじゅんせつ あい わざ い まね いちじよ
四旬節にあたって、わたしたちは「愛の業」に生きようと招かれます。その一助と
して、カリタスジャパンなどを通じた援助事業に資するための献金をするようにと勧め
られます。そういった行動は、わたしたちがキリスト者として優しい人だからそうする
のではありません。それは、あの父親に倣い、連帯を実現しようとする、一人ひとりの信仰
における決断に基づく行動です。